

人とのかかわり、モノとのかかわり

鎌 田 康 男

現代の私たちはモノ、とくに人工物にあふれた社会に生きています。目を覚ましてから寝るまで、人と顔を合わせるよりは、モノに接して生きている時間の方が長いくらいです。大学へ行くときは乗り物、勉強するときはパソコン、連絡を取るときはスマホ、という具合で、人との直接のかかわりは空き時間にするもののようです。その結果、人どうしのかかわりにも変化が起こりつつあります。

私たちはモノの利便性に依存し、モノから楽しさや快適さを期待します。生き物や人との関係は相手次第で、モノのように思うとおりにはいきません。モノとのかかわりが増えると共に、快適さが当たり前になって、逆に不快なこと、不快なモノを忌避する傾向が強まってきたように思えます。気持ちの悪い虫を避け、気持ちの悪い人を排除する傾向が強まったのも、そんな背景があるのかも知れません。

人間らしさの特徴とも考えられる相互信頼、友情、愛情などにかぎって、相手の心が外から見えないばかりに、予測できないこともあります。そのために恋の悩みも生じます。人とのかかわりは深まると共に喜びや幸せも大きくなりますが、逆にその関係が冷えたり、崩壊したりすることもあります。

人とのかかわりは、人間ひとり(自分だけ)では対処できないこと、予想できない不幸や事故を助け合いながら乗り越えてゆくという、人間の社会性とともに発達してきたものですから、苦しみや悲しみを分かち合うことは、人のかかわりの基礎にあるものだと思います。共に苦しみをくぐり抜け克服することに、人と人のかかわりのすばらしさがある、ということを、家族、恋人、友人、さらにゼミや部活などを通じて私たちもしばしば経験します。

しかし快適さを求めることに特化したモノとのかかわりが、苦しみを共にすることよりもお手軽に見え、人とのかかわりより優先される傾向があるのではないか——その結果、人の孤立化・孤独化が進み、人との付き合いの苦手な人が増え、それが人の孤独化とモノの関係への逃避とを強めるという悪循環をひき起こしているように思えることがあります。そのような現代に生きる私たちにとって、「マスター・フォー・サービス」は、安易に便利で楽しいことに流されるだけでなく、他の人と苦しみを分かち合い、人に仕えることによってより豊かな人間関係・社会関係を生み出すことを促すメッセージでもあるのかも知れません。

(総合政策学部教授)